

二〇二六年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は 一 から 二、2 ページから 23 ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一

次の文章は、夫や妻などといったパートナーを指す新たな呼び名がなかなか定着せず、人々が呼び名の選択に困っているという「パートナーの呼び名問題」について述べたものである。これを読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

「間違^{まちが}った日本語^はに恥^はずかしい」「正しい日本語^はに恥^はずかしくない」という価値観は、日本語を「正しいかどうか」という基準で評価する傾向^{けいこう}を示している。日本語の話し手は、自分がどのような呼び名で、どのようなパートナー関係を表現したいのかを考える前に、正しい日本語かどうかでことばを選ぶようだ。

このような言語^ごイデオロギーを、本書では「正しい日本語観」と呼ぶ。①「正しい日本語観」は、主に二つの考え方から成っている。

ひとつは、日本語は、それぞれの場面で正しい話し方が決まっており、話し手にとって大切なことは、正しい話し方のルールを学び、そのルールに適切に従うことだ、という考え方だ。

二つ目は、正しい話し方のルールは、すでに決まっており、一般^{いっぱん}の話し手には、ルールを変更^{へんこう}する権利も、責任もない、という考え方だ。

すぐ分かれるとおり、この二つの考え方は密接につながっており、「正しい日本語観」はこの二つの、日本語の使い方に関する従順で受け身な態度に特徴^{とくちょう}付けられる。順番に見ていこう。

第一の「正しい話し方のルールに従う重要性」は、特に敬語の使い方に関する意見に多く見られる。敬語に関する数多くの公的、私的な言説^{*2}は、それぞれの場面には適切な呼び名や話し方があることを強調している。たとえば、二〇〇七年に文化審議会が答申した『敬語の指針』の「自分や相手の呼び方の問題」では、以下のように述べられている。^{*3}^{*4}

自分のことをどう呼ぶかについては、場面に「オウジタふさわしい言い方がある。ただし、必ずこうしなければいけない」という決まりがあるわけではない。

ここには「必ずこうしなければいけないという決まりがあるわけではない」とも書いて「②」、その前に「場面にオウジタふさわしい言い方がある」とある。「ふさわしい言い方」をしなければ、「適切な選択ができない人」とみなされてしまうかもしれない。呼称に関しても、「場面にふさわしい選択」は重要なのだ。

言語学者の岡本成子とジャネット・ジバモト・スミスは、敬語に関する日本政府の出版物を丹念に分析し、「日本政府は、それぞれの場面には正しい敬語があるという考え方をつくり出し、社会に普及させる上で、積極的な役割を果たしてきた」と指摘している。

敬語だけではない。日本語の話し手が「正しい話し方のルール」を重視する傾向は、第六章で見た、③他人のパートナーを呼ぶ時の選択にも表れている。「主人」や「旦那」に違和感を持っていても、「他人のパートナーは丁寧に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先する。どのような呼び名を使って、どのようなパートナー関係を表現したいのかという、自分の考えよりも、「正しい」とされている規範を尊重するのだ。

長いあいだ、「正しい言い方を選ぶ」ことに意識が向いていると、「自分の考えでことばを選ぶ」経験は減っていく。この二つの違いを、私自身が実感した出来事がある。

四〇年以上前にアメリカに留学したときだ。周りの学生を見ると、教授をいろいろな名前で呼んでいた。そこで、一番お世話になっていた教授に、「先生のことを何と呼んだら良いですか?」と聞いた。すると、

「何と呼んでもかまわない。プロフェッサー・スミスでもいいし、ミスター・スミスでもいいし、ジョンでもいい」
と答えたのだ。そう言われて、私は、④次の言葉が出てこなかった。教授をなんと呼んだら良いか、自分で決められなかったか

らだ。

日本にいたときは、何も考えずに「〇〇先生」と呼んでいれば良かった。それが「正しい」呼び方であり、大事なものは、場面にふさわしい「正しい」呼び方を学んで、それを使えることだった。先生をなんと呼びたいか、自分で考えて決めるなどということは、思ってもみなかった。だから、相手とどういう関係でいたいのかを考えて「自分らしい呼び方」を選ぶことなどできなかったのだ。

この出来事は、私に日本語観について考える機会を与えてくれた。私たちは、場面に適したことを選ぶことにかけては有能だ。それは、それぞれの場面には、その場面に適した正しいことばの使い方があって考えているからだ。どのようなことばが、どのような場面に適切かはすでに決まっている。必要なことは、「正しい日本語」のルールを習得してことばを使い分けること。

このようなスタンスは、日本語を「正しいか／正しくないか」という視点ではかり捉える傾向を強める。人の話し方を聞いていても、自分が話し方を選ぶときにも、それが「正しい話し方かどうか」ばかりが気になる。

もちろん英語でも、「場面に適したことを選ぶ」ことは重要だと考えられている。しかし、それと同じぐらい重視されるのは「選択がある」ことだ。北米では「自由」の具体例のひとつが「選択があること」だ。だから、「自分を何と呼んでもかまわない」と言った教授は、ある意味、私に「選択する自由」を与えてくれたのだ。

文化によっては、この「選択する自由」をb幼少期から与えている。三〇年ほど前に、娘がカナダの小学一年生になったときのことだ。担任の先生から、クラスの子どもたちに日本の折り紙を教えてくれと頼まれた。ところが、私がはりきって教室に入ると、先生が一番に宣言したのだ。

「モモコから折り紙を習いたい人は教室の前に来て。習いたくない人は、うしろの読書コーナーで本を読んでください」
すると、数人の子どもが、教室の後ろにトコトコと歩いていった。

⑤これには、驚いた。日本の小学校ではみんなが同じ事をするのが当たり前だった。ところが、カナダの先生は小学一年生にも

「選択する自由」^{せんたく}を与えた^{あた}のだ。さらに、小学一年生でも選択する機会^{せんたく}を与えられれば、自分がどうしたいか決めて行動すること^{あた}ができるのだ。

当時の私と言えば、昼食を食べるにも付け合わせはフライドポテトかマッシュポテトかにはじまって、サラダのドレッシングまで選ばなければならないのが面倒くさくて、「⑥早く日本に帰って、「A定食！」って注文したいなあ」と思っていた。「選択する自由」が苦痛だった。そんな私が、教授をなんと呼ぶかなど決められるはずもなかった。

もちろん、カナダにも「選択する自由」^{せんたく}が面倒な人はいるし、日本にも選択できる人はいるだろう。ただ、「正しいものを選ぶ」と「自分で選択する」^{せんたく}がどのくらい強調されているのか、その程度が異なるのだ。

これは、どちらが良いという話ではない。カナダでは、自分の選択に固執して、人間関係がうまくいかなってしまった例も見てきた。ここで確認したいのは、日本語の話し手は、「自分の考えで選択する」^{せんたく}よりも「正しい話し方」のルールを優先する傾向^{けいこう}が強いという点だ。

ルールを優先するという従順な意識は、自分ではなく「誰かに正しい呼び名を決めてほしい」という他力本願な姿勢につながる。
「正しい日本語観」^{しゅごかん}を特徴付ける二つ目の考え方は、「一般の話し手には、正しい話し方を決める権利はない」というものだ。
この考え方は、アンケートに寄せられた意見に、もっとも端的に表現されている。パートナーの呼び名問題を解決するために、「誰かに正しい呼び名を決めてほしい」という意見があるのだ。

・もう、新しく作り出して欲しい！ 愛着もわきそうな、男女対等でフランクで、けれど失礼でないような呼び方を。日本語学者とか、古典学者とか、だれか良い案ありませんかね。
*7

・男女関係なく〇〇と呼びましょう！ とか決定してほしい。

(女性30代、「ハフポスト二〇二一年調査」)

・ 良くない呼び名があるなら良い呼び名はこうであると示してほしい。

(50代男性・公務員、「中日二〇二三年調査」)

二〇二二年二月にテレビ番組『五時に夢中!』で、パートナーの呼び名問題が取り上げられた。出演していたマツコデラックス^{*8}は、他人のパートナーをどう呼ぶかについて以下のように訴えた。

「正しい言葉を教えてよ。⑦ 私たちずっと悩^{なや}んでいるのよ」

これらの意見から分かるのは、自分たちには何が正しい呼び名か決める資格はない、あるいは、決める責任を取りたくないという意識だろう。だから、「日本語学者とか、古典学者とか」、自分以外の誰か^{だれ}に決めてほしいと訴^{うた}える。誰か^{だれ}が決めてくれれば、「私たち」は責任を取る必要がない。

「誰か^{だれ}に決めてほしい」という他力本願な意識は、呼び名に関して法律などが制定されれば、大した抵抗^{ていこう}もなく新しい呼び名が普及^{ふきゅう}することを見ても明らかだ。

たとえば、第一章でも見たように、二〇〇二年に「看護師」が「看護師」^{へんこうし}に変更された。それまで、この職業に従事している人のほとんどが女性だったこともあり、「婦」という女性を表す漢字が使われていた。ごく少数の男性には「看護士」が使われていた。しかし、二〇〇一年に「保健婦助産婦看護婦法」が「保健師助産師看護師法」^{めいしやうへんこうし}に名称変更され、翌年には性別による呼び名の区別が撤廃^{てつぱい}され、男女ともに「看護師」となった。背景には、男女雇用機会均等法に^{だんじょこようきかいきんとうほう}モトづいて、男性の就業をうながす目的があると言われている。

⑧ 「看護婦」から「看護師」^{へんこうし}への変更はまたく間に受け入れられ、ジェンダー中立な「看護師」は日本全国に普及^{ふきゅう}していった。主従関係を表さないパートナーの呼び名が七〇年近くも普及^{ふきゅう}していないのに、「看護師」が順調に普及^{ふきゅう}した理由は、法的な決定があるかないかだろう。日本語の話し手は、法的な決定があれば、つまり個人ではなく国が責任を取ってくれるのならば、呼び名を変えることに抵抗^{ていこう}感が小さいのだ。

(注)

- *1 言語イデオロギー——言語に対する考え方。
- *2 言説——ことばで述べられたもの。
- *3 文化審議会——ぶんかしんぎかい文部科学省に設置された機関。
- *4 答申——他の機関からの質問や依頼いらいに対して、意見や回答を述べること。
- *5 プロフェッサー——教授。
- *6 固執——こしつ物事にこだわり、主張してゆずらないこと。
- *7 フランク——気さくであること。
- *8 マツコデラックス——芸能人。表記は原文に即そくした。

問一 —線①『正しい日本語観』は、主に二つの考え方から成っている」とありますが、二つ目の「正しい日本語観」の具体的な説明はどの段落から始まりますか。段落の最初の五字を抜き出しなさい。

問二 空らん「②」に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あるし イ あるが ウ あるので エ あれば オ あって

問三 —線③「他人のパートナーを呼ぶ時の選択」^{せんたく}とありますが、日本語の話し手はどのような選択^{せんたく}をすると考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「他人のパートナーは丁寧^{ていねい}に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先すると、本当に丁寧^{ていねい}な呼び方なのか違和感^{いわかん}があるため、「主人」や「旦那^{だんな}」という呼び名は使わない。

イ 「他人のパートナーは丁寧^{ていねい}に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先し、その呼び名で関係性が表現できるのか違和感^{いわかん}があっても「主人」や「旦那^{だんな}」という呼び名は使わない。

ウ 「他人のパートナーは丁寧^{ていねい}に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先し、本当に丁寧^{ていねい}な呼び方なのか違和感^{いわかん}があっても「主人」や「旦那^{だんな}」という呼び名を使う。

エ 「他人のパートナーは丁寧^{ていねい}に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先すると、その呼び名で関係性が表現できるのか違和感^{いわかん}があるため、「主人」や「旦那^{だんな}」という呼び名を使う。

オ 「他人のパートナーは丁寧^{ていねい}に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先し、その呼び名で関係性が表現できるのか違和感^{いわかん}があっても「主人」や「旦那^{だんな}」という呼び名を使う。

問四 —線④「次の言葉が出てこなかった」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本にいたときに使っていた「先生」にあたる言葉で教授のことを呼ぼうと思った筆者だったが、日本で使っていた「先生」にあたる言葉を自分で考えて選ぶことができなかったから。

イ 学生と教授との関係性が個々の呼び方に表れているのだと気付いた筆者だったが、一番お世話になっているという関係性を表せるような呼び方を自分で考えることができなかったから。

ウ どのような関係であって先生であれば「〇〇先生」と呼びさえすれば良いという日本の価値観で生きてきた筆者は、教

授から自分の浅はかさを見すかされているように思い困惑したから。

エ その場面に合わせた正しい呼び方が使えさえすれば良いと思っていた筆者には、自分と教授との関係性を表す呼び方を、色々な呼び方の中から自分で決めることができなかったから。

オ 何と呼んでもかまわないと教授から言われたものの正しくない呼び方をすれば恥をかくと思った筆者は、何と呼ぶのが正しい呼び方なのか答えを探して考えこんでしまったから。

問五 — 線⑤ 「これには、驚いた」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 担任の先生から折り紙を教えてほしいと頼まれたということは生徒も折り紙を習いたいと望んでいるのだと筆者は思っていたのに、習いたくないと思っていた生徒が少なからずいたことが分かったから。

イ 担任の先生が頼んだ手前、筆者から折り紙を習いたくないという意思表示をすることは失礼なことのように思われるのに、一部の生徒は折り紙を習いたくないという自分の意思を遠慮なく表明していたから。

ウ みんなに同じことをさせる日本の小学校の先生とは違ってカナダの小学校の先生は個人の選択を重視しており、みんなと同じことをしなくてもよいという雰囲気（ふんいき）を自然と作りだしていたから。

エ 日本の小学校ではみんなが同じことをするのが当たり前だが、カナダの小学校では自分がそれをやりたいかやりたくないかを選択して行動に移さなければならないという文化の違いを体感したから。

オ 筆者から折り紙を習うか習わないかという選択の自由が子どものうちから尊重されており、生徒自身も自分の意思をもとに行動できるという日本では想像できないような光景を目の当たりにしたから。

問六 —線⑥「早く日本に帰って、『A定食!』って注文したいなあ」とありますが、「A定食」を注文することには、どの

ようなことが象徴しやうちやうされていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 制限のある中で選択せんたくの余地が残されているということ。

イ その場の状況じやうきやうに合った従うべき選択肢せんたくしがあるということ。

ウ 自分の意思で全てを決定しなくてもよいということ。

エ 細部までを自分で決める自由は与あたえられていないということ。

オ 自分の考えにもとづいて選択せんたくをしてよいということ。

問七 —線⑦「私たちずっと悩なやんでいるのよ」とありますが、「悩なやんでいる」内容の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちには正しいパートナーの呼び方を決める権利がなく、パートナーのことを呼びたいと思ったとしても正しい呼び方で呼ぶことができないことに悩なやんでいる。

イ 誰もパートナーの正しい呼び方を決めてくれないので、パートナーを呼びたくてもその呼び方が正しい呼び方かどうかを気にしなければならぬことに悩なやんでいる。

ウ 学者や国といった権力のある存在がパートナーの呼び方を決めてくれば定着しやすいのに、パートナーの正しい呼び方を決めてくれない無責任な態度に悩なやんでいる。

エ パートナーの呼び方を決める権利は自分たちにはないとはいえ、呼び名を定着させることに無関心でいたがゆえに自分たちも責任を問われることになるのだろうかと思なやんでいる。

オ 誰も正しい呼び方を決めてくれないせいで、パートナーへの呼び方が果たして本当に自分とパートナーとの関係性を正確に表しているのか誰だれにも分からないことに悩なやんでいる。

問八 ―線⑧『看護婦』からく普及していったとありますが、どういことですか。その説明として最も適当なものを次のア、

オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 男女の平等を重視するようになったことを受けて、国が「看護師」という新たな呼び方を決めたことによって、呼び名を決める責任を負わずにすんだ人々は「看護師」という呼び方を新たな正しい日本語のルールとして受け止め、抵抗なく使うようになったといこと。

イ 社会全体が抱える男女雇用の不平等という問題を解決するために、その系口として国が責任を持って「看護師」という新たな呼び方を決めたところ、人々は国が決めてくれたこの呼び方を使うことで知らぬ間に男女の平等を意識するようになっていったといこと。

ウ 性別を感じさせない「看護師」という新たな呼び方を国が設定したところ、呼び名の決定を政府任せにしていた人々がその呼び方を続々と使うようになり、性別によって就業者に違いが出ているという本来の解決すべき問題が見えづらくなつてしまったといこと。

エ ある職業が特定の性別のイメージを持つという問題を解決するために、国は「看護師」という新たな呼び方を決めたが、人々は何も考えずに国に従順に従って呼び方を変えただけで、社会の問題を意識することはなく、国が期待したようにはならなかったといこと。

オ 性別による呼び名の区別に煩わしさを持っていたものの、誰かが解決策を提示するのを待っている社会の風潮を受け、国が「看護師」という呼び方を作ったところ、自分たちが呼び名を決める責任を負わなくて良いと安心した人々が次々にその呼び方を使うようになったといこと。

問九 二重線「この二つの違い」とありますが、これは人の呼び方に対する考え方において、どのようなことを重視する違いとして表れるでしょうか。「前者は」、後者は…。」という形で、七十字以上九十字以内で答えなさい。

問十 ―線 a「オウジタ」・ b「幼少」・ c「モトツイテ」について、以下のそれぞれの問いに答えなさい。

(1) ―線 a「オウジタ」・ c「モトツイテ」のカタカナを、送り仮名を含めて正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいいにはつきりと書くこと。送り仮名はひらがなで書きなさい。)

(2) ―線 b「幼少」と組み立ての同じ熟語として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 年少 イ 少雨 ウ 減少 エ 少女 オ 多少

二 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

文^{ぶん}は在宅勤務^{ちやうけん}をしながら、高齢猫^{こうれいねこ}の茶々^{ちやちや}の看病^{けんびょう}を夫^{おつと}の賢吾^{けんご}と一緒に^{いっしょ}に行っている。茶々の病状^{びやうじやう}は日に日に悪化^{あくか}し、その看病^{けんびょう}のために文^{ぶん}はあまり休息^{きゅうし}をとれていなかった。それを心配^{しんぱい}した賢吾^{けんご}が気分転換^{てんかん}のために洋食屋^{やうしきや}オリオンのランチに行くことを提案^{ていあん}してくれ、促^{うなが}されるがままに文^{ぶん}はお店^{みせ}へ向かった。

「お待たせいたしました。トマトソースのオムライスでございます」

ぼうつとしていたら、いつの間にか料理^{りょうり}が出来上^{できあがり}がっていた。運^まんできた真湖^{まこ}さんにお礼^{れい}を言い、カトラリーケースからスプーンを手^てに取^とった。

トマトソースオムライスは、わたしがオリオンで一番好きなメニューだ。今日^{けふ}だっていつもと少しも変わらない味^{あじ}を作^{つく}ってくれている。

なのに、食べても、食べても、①心^{こころ}から美味^{おいしい}いと思うことができない。

昔からオリオンの料理を食べると幸せな気持ちになった。落ち込んでいても、悩んでいても、オリオンに来てお腹がいっぱいになったら、全部が大丈夫だと思えるようになった。

でも今は駄目だ。今だけは、美味しいものでは満たされない。

それでしか埋められない穴があるのだ。②かけがえのない大事なものは、他の何で満たそうとしても足りない。何にも代えられない。

「うにゃあん」

はっとする。視線を下げると、足元にネロがいた。

「ネロ。あ、もしかして出窓？」

「にやむ」

「いいよ、どうぞ」

「にやうにや」

ネロは向かいの椅子に乗り、そのまま出窓にぴよんと跳び移った。

日当たりのいい出窓はネロのお気に入りの場所だが、窓際のこの席に客がいるときには、必ず客に了承を得てからでないとのぼらない。躑けたわけではないらしい。ネロが自分でそうすると決めたのだ。

「ネロは賢い子だよねえ」

今の時季には熱くなつてしまいそうな、艶々の黒い毛並みを眺める。ネロはお座りをしながら、くわあっと大きくあくびをした。

「これだけ賢いと、本当に猫又になれるかな」

ネロほどの賢さがあれば、もうとつくに猫又ですと言われたって驚かないけれど。

「③茶々は、なれなかったよ」

猫は、二十年生きると猫又になるという。ならば二十歳になった茶々も猫の妖怪になったっておかしくない。でも茶々の尻尾は一本のまま、妖怪にならず、普通の猫として生涯を終えようとしている。

「うにゃ」

ネロが鳴く。黒猫は、尻尾を揺らしながらわたしをじっと見ている。いつもなら出窓にのぼるとすぐに寝てしまうのに。

「ごめん、冷めちゃうから早く食べろって言ってるんだね」

「にゃあう」

「ありがとね、美味しいよ」

ネロは「うにゃ」と短く鳴いて、ぷいと顔を逸らした。わたしは残っていたオムライスを食べきり、コーヒーを一杯飲んでから席を立った。

レジに入ったのはくるみちゃんだった。真湖さんを捜すと、キッチンで作業をしていた。オリオンのシェフはくるみちゃんひとりが、スイーツ作りは真湖さんが担当している。少なくなった品を作り足しているのだろう。

「そうだ文さん、渡したいものがあるんです」

お会計を終えたところで、くるみちゃんがそう言った。

「わたしに？」

「ちよっと待っててくださいね」

*2
バックヤードに向かったくるみちゃんは、見慣れたパッケージの袋を持って戻ってきた。茶々が唯一食べてくれた、猫の腎臓病用の療法食だ。

「これ、他の常連さんからネロにつて戴いたんです。飼つてた猫ちゃんがもう食べられなくなったからつて。でも、茶々ちゃんもこれ食べてるつて言つてた覚えがあつたので、なら文さんに渡そうと思つて置いておいたんですよ」

そういうえば、食べ始めたばかりの頃に「やつと食べられるものが見つかった」とくるみちゃんに話したことがある。憶えていてくれたのか。

「ありがとう」

差し出されたものを受け取つた。未開封の袋を見て、これをくるみさんへ譲つた人のことを考えてしまつた。自分の子に一番に食べてもらひたかつただろうに、どんな思ひで、開けてもいないごはんを渡したのだろうか。

わたしも。いつか茶々のために揃えたものを、手放さなければならぬ日が来るのだろうか。いつか、茶々を思ひ出にしなければいけない日が。

視線が下がる。唇の端が震えてしまふ。

「でも、茶々も、もう食べられないかもしれない」

④泣きそうになり咄嗟に顔を伏せた。くるみちゃんが慌てた様子でカウンターから出てくる。

「文さん？ あ、ごめんなさい、わたし」

「ううん、くるみちゃんの気持ちは、本当に嬉しいよ。茶々も喜ぶと思う」

「文さん……」

「ありがとね。ご馳走様でした」

顔を上げないまま「⑤」を返し、店を出た。A重たい夏の空気が肌にもつたりと纏わりついた。

早く帰らないと。そう思うと同時に、まだ帰りたくないと思つてしまつた。自宅マンションまでの最短の道を行かず、実家のほうを経由し、少しだけ遠回りして帰路につく。

オリオンから実家までは歩き慣れた道だ。物心ついた頃から数え切れないほど通ってきた。緩い坂道。低い赤煉瓦の塀。持ち主
自慢の枝垂桜。友達とよく遊んだ小さな公園。

足を止める。肌の焼かれる炎天下、猫のフードを抱えながら、ぼんやりと人のいない公園の片隅を見つめる。

茶々と出会った場所だった。家族でオリオンに食事に行った帰り道、わたしはここであの子を見つけた。

茶々の小さな呼び声を、わたしだけが聞いたのだ。

茶々はそして、わたしの家族になった。そばにいて、悩みを聞いて、辛いときには朝まで寄り添い、向こうもたっぷりと甘えてくれた。なんでもない一日を過ごすたびに、一生の宝物が増え続けた。

⑥わたしの人生の小さな幸せを集めたら、きっと茶々の形になる。

「……茶々」

わたしの茶々。たくさんの思い出と、経験と、幸福をくれた可愛い子。

茶々が与えてくれたものを、わたしはどれだけあの子に返せているだろうか。茶々の中にある思い出も、わたしと同じくらい、

温かいもので溢れているだろうか。

「茶々」

走って帰った。逸りながらドアを開けると、リビングへ続く廊下の奥から、よろよろと茶々が歩いてきた。

ここ数日、まともに歩くところなど見たことはなかったのに、茶々はわたしのほうへと自分の足で向かってくる。その後ろから賢吾が見守っている。

「茶々、お出迎えしにきてくれたの？」

時間をかけて廊下を渡った茶々は、わたしの目の前でバランスを崩した。倒れそうになった体を支え、抱き上げる。甘えた声を出す茶々の頭のとっぺんに鼻を寄せる。

「ありがとね、茶々」

涙が滲んだ。茶々が心配するといけないから顔は見せないようにした。茶々を抱き締めるわたしの肩を賢吾の腕が包み込む。

茶々のいない人生を、考えることはできなかった。だからこそ別れの訪れるその瞬間まで、家族みんなで笑って過ごそうと思

った。

茶々が、優しいものだけを抱えて旅立てるように。

それこそが、わたしが最後に茶々に返せる幸福なのだから。

四日後に茶々は息を引き取った。

苦しむことなく、眠るように、最後に深い呼吸をして、茶々は長い生を終えた。

その日はわたしと賢吾と三人で過ごし、翌日に葬儀と火葬をした。茶々の骨は年齢のわりにしっかりと残っていた。うちの茶々は骨になっても可愛いね、と賢吾と笑い合いながら、随分と小さくなった体を白磁の骨壺に納めた。

動物霊園からの帰り、家には寄らずに『洋食屋オリオン』に向かった。すべてが終わったところで急にお腹が空き、昨日からまともに食事をしていなかったことを思い出したのだった。

喪服ではなかったが、わたしも賢吾も上下を黒い服で揃えていたから、くるみちゃんは一と目見て察したようだ。キッチンからわざわざ出てきてくれた彼女に茶々のことを伝えると、くるみちゃんはみるみる涙を溜め、他のお客さんもお腹が空く中で泣き出してしまった。

「ううっ、ずびませんっ。わたしより、文さんたちのが泣きたいはずなのに」

「ううん、茶々のためにありがとうね」

「こ、こちらこそです」

「今までね、オリオンに茶々を連れて来られなかったから、やっと一緒に来られて嬉しいよ」
隣となりの椅子いすに置いてある紙袋かみぶくろに目を遣る。

その中には茶々の骨壺こつぽが入っている。

「ぐすっ……茶々ちゃん、いらっしやいませ、ずびっ」

「ふふ。くるみちゃん、ミートドリアをふたつお願いします」

「はい、すぐに作ってきますっ」

漬はなを啜すすり、くるみちゃんはばたばたとキッチンへ戻もどっていく。わたしは賢吾けんごと目を合わせて笑った。今日の料理はいつもどおり、心から美味おいしく感じられる自信おとしがあった。

ふと。賢吾けんごの隣となりの椅子いすに、ネロが跳とび乗った。客きやくがいるテーブルには椅子いすにだって勝手に乗らないネロだから、急に現れたことに驚おどろいてしまった。

「ネロ？」

声を掛かけるが、ネロはいつものようにこちらに愛嬌あいきやうを振りまくでもなく、しかし出窓でしやうにのぼるでもなく、椅子いすにお利口に座すわってどこかを見ている。

「にやにや」

ネロが鳴いた。⑦ご機嫌きげんなときの顔つきだった。どうしたのだろうか、ひとりで何かを陽気やうきに喋しゃべり続けている。視線は、わたしの隣の席せきに向いていた。誰も座だっていない……茶々の骨壺こつぽが置いてある椅子いすだった。

「……ネロ」

賢吾けんごを見た。目を真まっ赤にした賢吾けんごは、小さく一度頷うなずいた。

ネロは誰だれかとお喋しゃべりをするように鳴いている。

B 祝福を呼ぶような夏の日差しが、黒猫の柔らかな髭を光らせる。
「茶々、いるの？」

にやむ、と答えるときだけ、ネロの黄色い瞳がわたしを見るから。
堪える間もなく涙が溢れ、声を上げて泣いてしまった。

(『丘の上の洋食屋オリオン はなむけのひと皿』より「ミートドリアと星の声」)

沖田 円

(注)

*1 ネロ——十八歳になる洋食屋オリオンの看板猫。

*2 バックヤード——店の裏側の作業スペース。

*3 茶々と出会った場所だった——文が茶々と出会ったのは十二歳の時だった。

*4 白磁——陶磁器の一種。

問一——線①「心から美味しいと思うことができない」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オ

の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茶々の病気が日に日に悪化していくので、茶々の死を受け入れられそうにないことを毎日悩んでいるから。

イ 茶々が今も病気で苦しんでいるのに、自分が楽しく食事をしていることに罪悪感を抱いているから。

ウ 茶々との別れが近いと感じているが、もうあきらめることしかできないので途方に暮れているから。

エ 茶々と夫の賢吾のことが心配で、早く食べ終わらなければいけないと気が急いでいるから。

オ 茶々の病気は歳のせいだと思いつつ、自分にできることがもっとあったはずだと後悔しているから。

問二 —線②「かけがえのない」足りない」とありますが、「かけがえのない大事なもの」は本文中では何とたとえられていますか。最も適当な言葉を本文中から五字で探し、抜き出さない。

問三 —線③「茶々は、なれなかったよ」とありますが、それについてハト江さんとシマ子さんが次のように話をしています。次の会話を読み、後の各問いに答えなさい。

ハト江 え 茶々ちやちやの飼い主いぬの文ふみは茶々ちやちやが「猫又ねこまた」になれなかったとネロに話しているんだね。

シマ子 ねこまた そうそう。この「猫又ねこまた」ってなんなの？ 文章の中には二十年生きると猫ねこの妖怪ようかいになるって書かれているけど。どんな妖怪ようかいなんだろう。

ハト江 え 猫又ねこまたってなんだろうと思って、私も調べたの。そしたら、すぐたくさんの言い伝えが残っているね。「Ⅰ」にある自分の家の飼い犬を猫又ねこまたと間違えて大騒ぎしたお坊さんぼうの話とかは有名なんだって。他にも「猫又ねこまた駅えき」という駅もあって、猫又ねこまたが住んでいたという伝説のある山と関連があるそうだよ。

シマ子 ねこまた じゃあ、猫又ねこまたってすぐ有名な妖怪ようかいなんだね。やっぱり妖怪だから怖いこわのかな。文ふみは、茶々ちやちやのこと怖いこわと思ってなさそうだけどなあ。

ハト江 え 文ふみは怖いこわと思うおもてないと思うおも。猫又ねこまたには山の中にいて人を襲おそう獣けものと、長年人に飼われていた年老いた猫ねこが化けてなるものがあるんだって。猫又ねこまたにも種類があるそうで、人間を恨うらんでいる場合もあるし、恩返ししたり、苦しんでいる飼い主を助けてくれたりする場合もあるそうよ。しかも、人の言葉を理解して、会話できる猫又ねこまたもいるんだよ。

シマ子 ちやちや そっかあ。そしたら、「茶々はなれなかったよ」と言ったのは、文ふみが「Ⅱ」を抱いだいていたからなんだろうね。

(1)

空らん「Ⅰ」には鎌倉時代に兼好法師が書いた随筆の題名が入ります。その作品の冒頭として最も適当なものを次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

イ ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

ウ 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

エ つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

オ 春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢のおほく飛びちがひたる。

(2)

空らん「Ⅱ」に入る言葉として最も適当なものを次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茶々が人を襲うことになっても、別れについて考えられないという思い

イ 茶々がどんな姿になってもいいから、いつまでも離れたくないという思い

ウ 一生懸命看病したから、茶々にその恩返しをしてもらいたいという思い

エ 茶々と多くの思い出話ができるくらい、ずっと家族でいたいという思い

オ たとえ猫又駅におくられても、これから先も一緒にいたいという思い

問四 — 線④ 「泣きそうになり咄嗟に顔を伏せた」とありますが、なぜ文はこのような行動をとったのですか。その理由として最

も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が辛い思いをしているとくるみに気づかれまいと、泣きそうな顔を見せないようにしようと考えたから。

イ 療法食を食べていた猫とその看病をしていた飼い主のことを想像すると苦しくて仕方なくなってしまうたから。

ウ 現在の茶々の病気の状態も知らずに無邪気に療法食をくれようとしたくるみのふるまいにとても腹が立ったから。

エ 茶々がこの療法食を食べていた猫と同じ状況になった時に自分が他人に対して優しくできる自信がなかったから。

オ たくさんのお客さんが来て毎日忙しいはずなのに昔話したことを覚えていてくれたくるみの優しさに感動したから。

問五 空らん「⑤」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 掌 てのひら イ 仇 あだ ウ 恩 エ 裏 オ 踵 かかと

問六 — 線⑥ 「わたしの人生の小さな幸せを集めたら、きっと茶々の形になる」とありますが、どういことですか。その説明と

して最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辛い時もうれしい時も茶々が一緒にいてくれて幸せだったということ。

イ どんな時も茶々の幸せを最優先に考えて生活をしてきたということ。

ウ 茶々との思い出はいつまでも心の中で生き続けると気づいたということ。

エ 茶々に出会うまでにあった幸せな思い出を忘れてしまったということ。

オ 茶々が苦しい時に寄り添ってくれていたことを思い出したということ。

問七 — 線⑦ 「ご機嫌なときの顔つきだった」とありますが、なぜネロがそのような顔つきでいるのだと文は考えているのです

か。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茶々の看病のため二人そろってることができなかった文と賢吾が、そろってオリオンに来たから。

イ 今まで話に聞いていただけで会えなかった茶々と会うことができ、楽しく会話をしていたから。

ウ 前は美味しうなさそうに食事をしてた文が、今日は美味しそうにミートドリアを食べているから。

エ 大好きな文と賢吾と茶々と同じテーブルに着き、これから話をしながら一緒に食事できるから。

オ ずっと病気で苦しんでいた茶々が元気になってオリオンに来てくれ、久々に会うことができたから。

問八 二重線 A「重たい夏の空気が肌にもったりと纏わりついた」、B「祝福を呼ぶような夏の日差し」と文が感じる「夏」の様子が異なっている。これは文のどのような心情の違いを表していますか。「Aは」に對し、Bは」という形で、「」という違い」に続くように、五十字以内で答えなさい。

